

帰ったかと思ったら、すぐ又やって来て、「僕おせん香持ってきた」

と申しますので、火を付けて、立ててやりました。一緒におがんでやりましたら、とても喜んで帰りました。それから、今日はお花を持って来たんだ、とお花をそなえたり、おせん香を持って来たりしました。

それからのお地蔵様の前には、色々の動物の名札が並びました。

わんぱく坊やも、おとなしくなり、人の世話をやいたり、仲よく遊ぶ様になってくれました。幼い子に、物をあわれむ気持ちを持たせることは、むづかしいですが、だんだんに自分から、何となく感じて来てるものだなーと喜んでいます。

家庭でやってもらえない、幼児達のしつても、園で補って行かねばと、児童年にあたって、深く痛感しております。

## 大正時代を中心とした

### 宗門児童福祉 管見

山田 巖雄

一  
仏教児童福祉に関してならば、何か書けようと思つて、いざ筆を執つてみて、はたと当惑した。

第一に資料が無い。

次に、浄土宗門内のことは少しは知つてゐるが、仏教界の児童福祉となると、他宗の実状は判らない。

第三に、宗門内のことなら、少しは知っているつもりでも、それは私が生れて育つた東京方面のことだけしか判つてゐないこと、京都、大阪のことさえ判つてゐない。

第四に、仏教福祉の代表施設や団体、指導的立場に当つたり、実践活動に尽した先輩、故老にしても、一般的に知られてゐる著名人だけしか知らない。黙々と努力をされてゐた人たちは、各地に数多くあつた筈

だが、これも全く判かつてゐない。

これでは到底五十余年前の児童福祉の回顧など書くことはできないと気付いたからだ。

しかし、それだからといつて、今さら書かない訳にはいかない。それに、どんなに不十分だとしても、以下記すことにした諸項の内には、この際記しておかないと、忘れられてしまう恐れのあるものもあると考へて、不備、管見を省みず、敢えてペンを走らせることにした。(文中敬称は一切略してある。)

#### 仏教福祉と時代の動向

エレン・ケイは二〇世紀は児童の世紀だといつた。確かに十九世紀の後半から、児童に対する認識が改たまり、児童の身体的、精神的研究が進み、児童の教育の面でも、児童文化の面でも、児童福祉の面でも、前世紀までの旧態を一変させて、新しい前進と展開を遂げた。

仏教界に於ても、この大きな時代的動向に即応して、児童福祉の面でも、大きな変化と飛躍を示した。しかしその蔭には明治

末葉以来いくつかの段階と先人の努力があった。

### 仏教児童福祉の黎明期

年代的範囲を明治以降に絞る。

私が知る限りでは、東京には芝増上寺で福田行識の少年講があるが、その内容は知るすべがない。

明治初年の廃仏棄釈によって、仏教寺院はいずれも手痛い打撃を蒙った。そのさなかにあつては、児童福祉どころではなかった。そういう時代的背景の中の少年講だけに、その意義は深いと考える。

わが国の情勢は、明治三年に小学校規則が定められ、明治五年頃から小学校教育が開始され始めた。国家の財政は苦しい。国内的には明治二三年の帝国憲法の制定、対外的には明治三十年までかかった不平等条約の改制などに追われていた当時の国内事情からして、なかなか文化の面は言うに及ばず、福祉の面まで手が及び得ない実状であつた。

このような状態の中で、僧侶は明治五年に肉食妻帯が認められ、寺は従来の師資相

承から、親子相統に序々に変つてきた。一方明治三十年代には廃仏棄釈の厳しい試練からの立直りを見せ、他方ではキリスト教の伝道や教化活動に刺激されて、各宗の先達故老が期せずして、布教伝道に、児童教化に熱意を燃やし、身を挺して事に當るようになった。

しかし、始めはその殆んどが、個々の、少数の有識者によって行われたものであつた。

### 明治後期の仏教児童教化について

私見を避けて、この時代の実状を知っている先人のことばを通して眺めてみよう。

昭和十三年一月刊行の浄土宗児童協会年鑑から、故戸松孝暎の「児童教化事業の今昔とそれから」の一部を引用する。

明治の後期即ち三十四年の秋、原青民上人は浄土教報誌上に「少年教化」なる論説を発表して這回運動の先陣を承つた。(中略)

当時の寺院連中は寺の事だけで一杯で他に余裕を持たなかつた。子供の世話なんかやいて居られるものかと云うのが本音であつた。

この時に当り兎にも角にも偉い鼻息で外敵に當る一種の敵愾心を鼓舞しての少年教会運動者は教界の荒鷲であつたろう。当時の少年少女も信仰侮蔑の大人連の仕込みだけあつて、寺は縁起の悪い処、坊さんは一文貰いの鐘叩き、坊主丸儲けで好人不当、寺の境内で悪戯はするが本堂には上らない。境内で顛倒すれば寿命が短かくなると云つた調子で手がつけれられない。こんな悪気流の大嵐の内に、寺での集會が始まつたのだが、景気は頗る悪い。菓子や煎餅の景品で来て貰つた筋もある。

その内面白半分、まじめ半分の分子も出来てそろそろやつて来た。情けない事だが肝心な寺院連や寺族は、集會を厄介者扱い、邪魔物扱いとなし、宗門一般も亦物好きだ、酔狂だと嘲笑する位が関の山、同情する人は極めて少数であつた。

教える者も、教本は無し、前例もなし、無我無中で何でも彼でも子供を寺へ引きつけばよい主義で、先づ無統制に近いものであつた。土台宗務所も本山

も子供の事など眼中に置かず、又やる方もそんな事など頭に置かず、只やればよい、やらすには居られぬ。白襷を掛けた挺身隊、決死の勇を振って不惜身命、大旗をかざして、よくこの聖戦に従事した。

子供の集りは悪かったが、先生連も大量生産でなかったから、手が届き、継続している内に、先生と子供との間柄もしっくり行つて、寺小屋風な親しみさへ覚えるに至った。当時の子供が四十男、四十女になった今日、故先生の墓参りをしたり、寺や先生を有り難がつて消息して来るのは、皆この仏縁の所生である。狭いが深い、熱で彼等を抱擁した結果であらう。」

と記しているが、黎明期の児童教化の実状を偲ばせると共に、大先達たちの苦勞を尊く思うと同時に、その時代に比べて、恵まれすぎている現在のわれわれに欠けている点を、鋭く衝いていると反省させられる。

三の輪の浄閑寺で、現在の慈光学園の前身である少年耕学会を、戸松学映たちが毎週土曜日に開いたが一人か二人、というこ

ともあったという。「それでも休まないで続けた」という（故戸松学映談）。

各地方で、各宗の方々が同じような体験を重ねたことであらう。

黎明期に於ける浄土宗の先達として、前記の論説の中で戸松学映は、

原 青民 竹中弁中 梶 宝順  
赤尾白嶺 久保田量寿 小篠竜雄  
西島義豊 原 善久 岩野真隆

の諸師の名を記している。いずれも東京であり、既に故人になられた方々ばかりである。

追補すれば、京都に塩釜義詮 秦 隆真  
大阪に長谷川順孝、小林学心ほか教師、そのほか全部の尊名を挙げ得ないが多くの先覚者の業績は忘れることができない。

### 大正時代

明治三十年代の後半から始まった寺に子供を集めて行ったことは、その住職か寺庭の者が得意とする、算盤、習字、予復習などの勉強会や、子供を集めて百万遍を修した寺もあった。子供たちはその後で貰うお菓子やおせんべいが目当てであつたらしい。

童話を読んで聞かせたり、御絵伝などに ついて話をして聞かせるのはよい方であつた。

子供を集めても、教材は無し、讃仏歌も、童謡も無かった。第一楽器が無い。童話にしても、何を、どう話したらよいかわからないという明治の末期から比べると、大正時代は児童教化の面でも新しい息吹きを始めた時代である。

この事実を正しく理解するためには、まず大正という時代的バックを見直す必要がある

いま、ここでは児童福祉に関係の深いものだけについて考えてみよう。（順不同）

児童の研究が進んだ。

社会事業が公私で始められた。

童話の話し方が普及した。

童謡・舞踊、自由画、児童劇などの盛興各宗が児童教化や社会事業を重視して、指導や助成に努めるようになった。各仏教大学に児童研究部が設けられた。ラジオ放送が大正末年から開始された。などが挙げられる。

しかも、こどもたち自身にとっては、テ

レビはなし、児童遊園は無し、童話や日曜学校は大きな娯楽であった。

飛躍的な発展の跡が見られる。

だが、その反面、大正時代にはまだ社会事業といえば、社会主義（いまの人たちが理解している社会主義とは違ったニュアンスをもっていた）と間違える人たちも多かったから、決して平坦な道を楽に歩んだ訳ではない。

資金の面でも、各寺院、各本山、各宗務所など、どこも決して潤沢ではなかったから、こども会のリーダーたちは、自分の小遣いを割いて、手弁当で奉仕したものだ。

### 大学児童研究部の側面

視野を変えて、大正以後の各大学の児童研究部時代から、卒業後も引き続き児童教化及び文化運動の各分野で活躍した人たちを、各人の特技の上から眺めると、次のような傾向が認められる。

イ、大正時代は口演童話が花を咲かせたが童話の学的研究も進んだ。鈴木三重吉等の赤い鳥の刊行と共に、童話の創作、山本有三等の自由画の提唱、童謡の創作ならびに

作曲、つづいて童謡舞踊が盛んになり、そのそれぞれが各宗大学の児童研究部の若い学生たちを刺激して、各自を好める途に進ませた。

ロ、年代によって次のような傾向が見られる。最初は児童研究と会の組織固めに力がそそがれた。

ハ、次に口演童話の話し方の研究が盛んに行れて、現在も活躍している各宗のこども党の先輩には、この畑の練達の士が多い。

三輪寿雄、西村隆信、内山憲尚、岩野高秋、曹洞の桑原自彊、北村大栄等。絵ばなしでは浄土の若麻績貫保、西村隆信、前記の桑原、北村両氏などが挙げられる。

次いで大体大正の終りから昭和の始めに童謡の作詩及び作曲の面で活躍した青年が目立つ。浄土の松濤基道、曾我見也、天台の吉川真洞、本多鉄磨等の音楽家、作詩の江崎小秋、浄土の坂野春浪、童話及び創作に高橋良和等がいる。

これには仏教音楽協会が残した業績と会のために協力された弘田龍太郎ほか専門の音楽家たちの影響や指導も与って力があつた。

音楽の研究グループに次いで出たのが、童謡舞踊界の面々で、曹洞の賀来琢磨を始めとして、浄土の鈴木錦承、本多隆成、森爽海、中沢善宏、等多士済々である。

続いて、歌唱指導、ゲーム指導等に練達の若人も挙げなければならぬまいが氏名省略。仏教保育界に於ては、内山憲尚、山内勇仙、青柳義智代、堀緑羊、その他各宗にわたって、各地にその数は多い。

ボーイスカウト関係でも、浄土だけでも原善久、若麻績貫保、原善正、内山憲尚、高橋良和等の功労者が数えられる。

私がこの項で特にいたいことは、

児童教化の指導者は、それぞれの分野で専門的な知識と技術と識見を持った人材が必要とされる時代になってきたこと

各分野の人たちの相互の理解と協力のものとに運営され、継続されねばならぬとい

と考えるからである。

それと共に、明治末葉から大正、昭和の始め頃の先輩たちの持っていた情熱と努力の跡が無言のうちに示してくれている。わ

れわれ後輩への誠めを銘記しておきたいからである。

## 今後の課題

今後の課題としては、既設の各分野のほか

児童の保健・衛生・栄養

スポーツ

芸術

科学

などの分野についても、眼を向け、理解しとり入れるべきは取り入れる必要がある。なお、僧侶自らの中から、各分野の有能者が得られなくとも、檀信徒の中から、よき助力者、協力者が得られるようになって欲しい。

## 五十年前の児童福祉の施設や団体

明治時代は勿論のこと大正から昭和の戦前までは、福祉ということばは使われてない。

それ故、児童を対象とする事業は、いずれも社会事業とか教化事業の中に包含されている。

昭和六年三月に教学教報社から刊行された「浄土宗年鑑」に浄土宗社会課調査発行の「浄土宗社会事業要覧」が載っているの  
で、それによって、その当時どのような施設や団体があつたか、概要を調べた。

まず社会事業を左のように大別している。

### 社会事業

#### 事業機関

- 一、各種社会事業
- 二、社会事業指導員
- 三、社会事業地方委員
- 四、報恩明照会

#### 互助機関

- 五、大乘同事協会
- 六、浄土宗児童協会

#### 特殊機関

浄土宗児童協会が特殊機関となっているのは、所謂半官半民経営となっているためである。

(一) 連絡統一助成機関 としては

浄土宗社会課

財団法人 報恩明照会

増上寺社会部

知恩院社会課

大阪四恩報答会

名古屋慈友会

の六つが載っている。現在とは名称や所管名は異なっているとしても、機構としては変

りない。

研究機関名と社会事業委員及協会名は省

略

## 二、総合的社会事業

名称

設立年月

代表者

浄土宗労働共済会 明四四、五 道重信教

マハヤナ学園 大正八、一 長谷川良信

慈光学園 一三、四 岩野真雄

小石川学園 一三、七 原田靈道

四恩学園 九、二 長谷川順孝

財団法人和光教園 九、一〇 萩野順導

釜山共生園 一三、四 太田秀山

松江隣保館 一四、四 長谷川良信

明照浄済会 元、八 清水法隆

隠岐共生学園 一三、一 名越隆成

三、救済事業（養老、窮民救助、施薬救療 助葬等）

助葬等）

二八施設、名称省略

四、防貧事業（職業紹介、宿泊救護、人事 相談、授産等）

五一施設——省略

五、司法保護事業（釈放者保護、少年保護 釈放者保護 十一施設——省略

少年保護 十一施設——省略

六、児童保護事業（育児、幼児保育、幼稚園、貧児教育、児童健康相談、農繁期託児所等）二一八施設―

省略

イ、この中明治時代に設立されたもの五

明治三十八年の 京都 平安養育院

三十九年の 山梨長安寺青藍幼稚園

園

ほか海外に三施設

ロ、大正年間の設立 七〇

ハ、昭和二年設立のもの 十六

三年 二〇

四年設立のもの 三五施設

五年設立のもの 五二施設

となっている。また

ニ、農繁託児所 八六施設

ホ、児童遊園 七ヶ所

ヘ、児童相談所 四ヶ所

が記されている。

七、一般教化事業

(一) 青年教化（青少年教育、青年会等）

八三団体

(二) 婦人教化（女子教育、裁縫伝習、主婦、処女、婦人会等）

二四三団体

(三) 各種教化（修養、敬老、戸主会、図書室等）

書室等）

一三六団体

ハ、児童教化事業（児童研究、少年少女教化児童図書室等）

(一) 連絡統一研究機関（設置年代順に記す）

仏教専門学校児童研究部昭4・4

京都

三枝樹正道

浄土宗児童協会 昭5・10

浄土宗務所 渡辺海旭

大阪浄土宗お伽団 大阪、極楽寺

小林学心

大正大学児童研究会昭6・11

大正大学内長谷川良信

児童愛養会7・5 東京浄閑寺岩野高秋

浄土宗東京連合少年団

8・11 増上寺中渡辺海旭

(二) 教化施設

三三四施設

こども会、日曜学校、日曜教園等の中

で、明治年間に開設されたものは

増上寺日曜学校41・1 増上寺 水谷宣隆

平塚コドモ会 43・3 神奈川県平塚

晴雲寺 清水大童

安養児童会44・7 崎玉西福寺稲岡寛順

明照日曜学校22・4 石川玄門寺吉田善

堂

明照コドモ会45・4 清水寺法岸寺

少年蓮友会32・10 愛知法栄寺林碩応

法性日曜教園44・12 滋賀西光寺永岡豊

存

ヒムレ日曜学校44・8 西光寺

柴田玄鳳

紫雲日曜教園34・9 石山町吉水善応

明照日曜教園45・2 蜂屋西方寺

河本定晴

四恩第一教園44・6 大阪成道寺

長谷川順孝

明照コドモ会43・9 佐賀南里田原典了

大音寺月影教園45・4 長崎大音寺

岩井智海

ほかに京城、ハワイ等に 五園ある。

現在との対比を行いたい、現在の資料

が手許にないために、不本意ながら触れる

ことができる。